

第1分科会 さがまちコンソーシアム発表報告

相模女子大学 学芸学部メディア情報学科 3年 山根 可奈

青山学院大学 文学部日本文学科 2年 北澤 紗彩

1. はじめに

第1分科会学生・市民が担うまちづくりとして、さがまちコンソーシアムでは、情報誌「さがまち」の製作過程と、製作によって得た知識や体験について述べた。相模原・町田地域は大学が多く学生のまちと呼ばれており、学生の地域社会への参加も積極的に行われている。さがまちコンソーシアムでは、右のように主に3つの事業を行っており、情報誌「さがまち」の製作は地域発展事業のひとつとして展開している。地域の発展を目的とするこの情報誌製作はまた、地域発展だけでなく人材育成の面でもかなり大きな役割を果たしている。情報誌「さがまち」の製作は、地域貢献活動の筆頭であるとともに、学生への新たな可能性をもたらす事業としての意味合いが強い。それは、1冊の情報誌の製作に企画から取材、編集、そして発送作業のすべてに学生が関わることで、この一連の作業に必要な様々な能力を実践で得ていくことに由来するだろう。今回の分科会では、私達の製作体験と、それにより感じたことや自身の中で変化した考え方などについて特に強調して述べた。まさに「さがまち」という地域発展事業を通し、私達自身も様々な面で成長することができたのである。



2. 特に強調した点について

前述した通り、特に強調したのは一連の製作過程の様子と、製作体験から得た知識や経験についてである。この情報誌「さがまち」の特徴は、企画から発送作業まで、1冊の冊子を作る過程をすべて学生が担うというところにある。もちろん、コンソーシアムのスタッフの方やデザインアドバイザーの方に助言をいただき、企画やレイアウトの方向性が定まっていくのだが、強く何かを指示されることはなく、学生の希望が第一に優先される。学生が思い通りにやれるからこそ苦勞するところもあるが、すべての作業を終えたときに製作前と比べて「できること」が増えているというのが私達の実感である。例えば、企画の原案をいくつも出すことや、企画書を作り人前で発表することなど、普段の大学の授業では体験できないことを製作の最初の段階から行う。取材のアポを取り、様々な場所へ取材に行くことも初めての体験で、何をどうしたらいいのか全くわからないところからのスタートである。取材のアポ取りや取材の方法に関してコンソーシアムの方から指導されることはあまりないため、取材先の方との実際のやり取りのなかで学んでいくしかなく、初

体験にしてはきついその試練が「さがまち」が出来上がったときの感動につながる。1冊の冊子が自分たちの手によって出来上がった感動とともに、自分が「できること」が増えたことも実感するのだ。アポ取りから電話やメールでの決まりの挨拶の仕方を学び、それを実際に使っていくことで社会のルールをひとつ、自分のものにできたのである。以前から苦手であった人前で話すことも、「さがまち」の製作過程のなかで何度も何度も経験することで慣れていき、「できること」に変わっていった。このように、今までしたことのない様々な経験をしていくなかで、学生の能力が自然に高められるという点で情報誌「さがまち」は人材教育の要素を持っている。また、「さがまち」という地域に密着した情報誌を製作するなかで、学生も自分の住むまち、通学するまちの情報を得る。またそれだけではなく、現地での取材を通して相模原・町田地域に暮らす人の生の声を聞くことで、まちの現状を知り、さらにこのまちをよくしていきたいという気持ちにも繋がった。学生に情報誌を製作する機会を与えることで、学生の能力向上とともに地域の活性化に興味を持たせることが自然にできるのだ。地域の情報誌の製作をする機会は、将来の地域の担い手の育成にも確実に貢献できるだろう。

3. 論点について

今回の第1分科会のなかで論点として話し合われたのは、各コンソーシアムの取り組みによる課題解決能力の向上についてである。さがまちコンソーシアムの情報誌「さがまち」の製作では、地域の課題を見つけそれを解決するといった内容の記事を載せる取り組みは今までほとんど行われていない。記事内容は相模原・町田地域の魅力的な場所や食べ物、人についての紹介がほとんどで、この地域の問題点を取り扱う毛色はなかった。これは、企画の段階で学生が参考にする資料（コンソーシアムが用意）が市の観光パンフレットなどの地域のプラス面を載せたものばかりであるため、現在地域で問題となっていることについて学生はほとんど知る術がないことに起因するだろう。参加する学生のなかで相模原・町田市内に長く住んでいる人はほとんどおらず、多くの学生は初めてこの地域に関わるため、観光パンフレットを頼りにするしかない現状となっている。この点に関しては、質問の時間やその後の情報交換会でもご意見をいただき、今後の製作活動における改善点として受け止めたい。また、製作活動に関しての課題解決能力の向上について言えば、半年間1冊の情報誌の製作に関わるなかで、個人よりグループで問題を解決する機会がはるかに多いため、グループで結束し問題に取り組む能力が向上する。製作のなかでの問題といえば、企画はしたが取材先が決まらない、取材先の方との連絡がうまくいかずこちらの事情が伝わっていない、担当ページのレイアウトが定まらない、など多々あるが、これらをグループで一つひとつ話し合っ解決していくことで、課題解決能力の向上につながっていくのではないだろうか。

4. 質問とその回答について

質疑応答の時間中、多くのご質問をいただいたため、いくつかを抜粋させていただくこととする。

まず、製作活動中のコンソーシアムの支援についてどう思うかというご質問についてで

ある。コンソーシアムのスタッフの方、ならびにデザインアドバイザーの方の支援の一番大きい点は、前述したように学生にあれをやれこれをやれというさく指示しない点にある。学生の意見や考えを第一に優先していただけるため、自分達のやりたいことがそのまま紙面や web のページに載る。自分の考えたものが実際に街で配られているというのはなかなかできない体験であり、そんな貴重な体験ができる情報誌「さがまち」の製作は学生にとって大きな誇りとなるだろう。また、コンソーシアムのスタッフの方やデザインアドバイザーの方は、年齢が若いため学生と話しやすい関係にあるのも特徴である。話しやすい環境であるため、意見を言いやすく、よりよいものを作ることにつながる。そういった面でも、コンソーシアムの支援は学生の活動を円滑にしていると思われる。

次に、製作においてつらかったことは何かというご質問に対して。つらかったことは多々あるのだが、その中でも取材のアポを取ることが一番の難関であり、つまりいた点でもある。学生で敬語をうまく使いこなし、定型の挨拶文をすらすらと言える人はほとんどいないだろうと思われる。私達も、もちろん敬語をうまく使えるわけもなく、挨拶などまったく知らない。その状態でいきなり取材の許可を取るとするのは、かなり厳しい試練であった。当然、電話をかけると怪しまれ断られることが多く、そのたびに落ち込んでいた。しかし、次の編集会議までには取材先を決めなければいけないという差し迫った状態のなかで落ち込んでいる暇はない。とにかく電話を掛け、メールを送り、という作業を何度も繰り返し、取材の約束を取り付ける。このアポ取りが一番つらく、またその分自分達の能力向上にもつながったのではないかと思う。

また、学生の募集方法についてのご質問もいただいた。これに関しては、各大学のポータルサイトに募集の通知が届き、学生は大学を通して申し込みをすることになっている。そのほか、コンソーシアムの他の事業に参加している学生に声を掛けて募集をすることもある。参加理由はさまざまであるが、出版や編集といった分野に興味があって参加する学生が多い。

編集会議の日程については、現在は毎週火曜日の 19 時から 21 時に行っている。毎週会議の時間が 2 時間しかないため、効率よく話し合わなければ時間内に終わらない。時間の制約があるため、話し合いもダラダラとせず内容の濃いものとなっている。それでも話がまとまらないときは、グループごと直接会って話し合いを行う場合や、Skype やメールを利用して連絡を取る場合もある。

5.他のコンソーシアムの発表を聞いて示唆を受けた点

南大阪地域大学コンソーシアムの学生国際ショートムービー映画祭については、学生のモチベーションを高めるため賞金を用意し、また CM 商談会などを行うことで、学生がビジネスの場に関わっている点に驚いた。賞金が貰えるということで応募作品の質も向上することは確実であるし、生半可な気持ちで参加できないという環境によって学生自身も鍛えられることであろう。CM 商談会では、学生が企業と関わる機会や、クライアントの意向に沿った作品の製作というビジネス的な活動をする機会を与え、芸術系の学生が就職やその後の仕事の仕方についても学ぶことができ、様々な面でのメリットを生み出しているように思う。

大学コンソーシアム京都の京都学生祭典については、学生の参加人数に大変驚いた。昨年の学生参加数が1700人強ということであるが、これだけの学生を魅了する祭典があることにも驚きである。また、地域との関わりということでおどり披露やおどりの出前教室などを年に何度も行っており、地域への貢献やおどりという文化の普及にも積極的であり、学生祭典ではあるが学生だけが利益を得る（経験的な意味で）のではない点が、この学生祭典が地域で認められている理由ではないだろうか。

6.今後の展望

私は学生であるため、さがまちコンソーシアムの運営などに関して今後の目標を述べることはできない。しかし、私達学生の側が感じることは、自分達の大学内においてコンソーシアムの認知度があまり高くないことである。一度コンソーシアムの事業のどれかひとつに関わってしまえば、その後違う事業にも関わってみたいと思う人が多い。それはコンソーシアムの方の学生への接し方や、学生への丁寧なフォローがあるからであると思う。しかし、認知度が高くないため、学生とのファーストコンタクトをとるのが難しい状態であるように思う。今後の地域への貢献や活性化を担う学生の育成のためには、地域内の大学での認知度を上げることがひとつの方法ではないだろうか。

また、私自身のことについて言えば、この情報誌「さがまち」の製作活動によって地域の活性化に興味を持ったことが自分の中でのかなり大きな転換であった。自分の住むまちのことを図書館で調べることや、取材をして直接人の声を聞くことを通して、地域を知ることの面白さを感じ、また取材先の方の相模原・町田地域への思いや活性化についての考えを聞くなかで、自分も何かをやってみたい！盛り上げたい！と考えるようになったのだ。相模原・町田は若い人からお年寄りまでみんな元気で活気があり、素敵なまちであるが、その先頭に立っているのは活性化しようという思いで動いている人たちではないだろうか。自分もその一人としてまちを盛り上げたいと思うようになったのは、情報誌「さがまち」のおかげだ。将来どうなるのか具体的には決まっていないが、どこかの地方に行ってこのまちのように活気あるまちをつくりたいと考えている。

7.最後に

南大阪地域大学コンソーシアム、大学コンソーシアム京都、そしてさがまちコンソーシアムを通じて私が感じるのは、学生を育てるための投資をいとわないということである。3つのコンソーシアムそれぞれが、学生の育成のため学生に様々な機会を与え、もちろんお金も費やしている。私達大学生は、4年間というモラトリアム期間を与えられている。その4年間で一体何をするのか、何ができるのかでその後の人生も大きく変わっていくかもしれない。何でもできるし、何もしなくてもいい。そんな中で、学生に様々な機会を与え、自分達の可能性を引き出してくれるコンソーシアムは学生にとって大切な存在である。そんなコンソーシアムの活動をもっと多くの人に知ってもらい、学生の道しるべとしてさらに飛躍していくことで、最終的には地域にも還っていくのではないだろうか。この分科会を通して、地域と学生とコンソーシアムの連帯は必要不可欠だと感じた。